

授業科目表【博士後期課程】

科目区分	科目名	担当教員			配当年次	単位数		DP1 看護創造	DP2 看護論述	DP3 社会発信	修了要件	
						必修	選択					
専門科目共通	看護理論学	近藤真紀子	兵藤好美		1前	2		◎	○		6単位	
	看護学発展論	井伊久美子			1前	2		◎		○		
	看護研究方法特論	片山陽子			1前	2		◎	○			
	小計(3科目)					6	0					
専門科目	実践開発看護学領域	基盤看護科学特論	小野美穂	呉小玉	筒井邦彦	1前		2	◎	○	2単位	
			比江島欣慎									
		地域在宅看護科学特論	片山陽子	辻よしみ	岡田麻里	1前		2	◎	○		
		精神保健看護科学特論	則包和也	土岐弘美		1前		2	◎	○		
		療養支援看護科学特論	近藤真紀子	岩本真紀		1前		2	◎	○		
		次世代育成看護科学特論	枝川千鶴子	植村裕子		1前		2	◎	○		
小計(5科目)						10						
演習科目	実践開発看護学特別演習	片山陽子	近藤真紀子	辻よしみ	1後	2		◎	○		2単位	
		小野美穂	則包和也	呉小玉								
		筒井邦彦	比江島欣慎	枝川千鶴子								
		植村裕子	岩本真紀	岡田麻里								
		土岐弘美										
小計(1科目)					2	0						
特別科目研究	看護学特別研究	片山陽子	近藤真紀子	辻よしみ	1~3 通年	6		◎	○		6単位	
		小野美穂	則包和也	呉小玉								
		筒井邦彦	比江島欣慎	枝川千鶴子								
		植村裕子	岩本真紀	岡田麻里								
		土岐弘美										
小計(1科目)					6	0						
合計(10科目)						14	10				16単位	

ディプロマ・ポリシー(DP)

◎:非常に対応している ○:対応している

DP1 専門領域に置ける独創的な研究を行い、新たな看護の知を創造する能力

DP2 科学的考察や議論を深めて、新たな看護の見解を論述する能力

DP3 自らの研究について、その真価を問うために社会に発信する能力

看護理論学 (Philosophy and Theory for Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	演習、講義
担当教員	●近藤 真紀子(KONDO Makiko), 兵藤好美(HYODO Yoshimi)										
授業の目的	理論の実践での応用・理論構築の基礎的能力の向上を目指す。										
到達目標	1. 理論とは何か、理論の必要性、理論の構造と種類、科学の発展と理論について、自らの言葉で説明できる 2. 看護実践における理論の意義と活用方法について、自らの言葉で論理的に説明できる。 3. 看護実践と研究を有機的につなぐ理論の活用方法について、自らの言葉で論理的に説明できる 4. 看護学の学術的発展、学体系の構築における理論の役割と機能について、自らの言葉で論理的に説明できる 5. 看護実践を支える哲学的基盤と理論について、自らの言葉で論理的に説明できる 6. 理論をクリティークできる 7. 理論の構築方法について、説明できる。 8. 各自の博士論文において、理論がどのように機能するのかについて、自らの言葉で論理的に説明できる。										
授業の進め方	授業の目的・目標に沿って、プレゼンテーションおよびディスカッションを行う										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	理論とは(近藤)【講義・演習】									
	2	看護実践と理論(近藤)【講義・演習】									
	3	看護実践と研究と理論(近藤)【講義・演習】									
	4	看護学の学術的発展・学体系の構築と理論(近藤)【講義・演習】									
	5	看護実践を支える哲学的基盤と理論(近藤)【講義・演習】									
	6	理論のクリティーク(1)(近藤)【講義・演習】									
	7	理論のクリティーク(2)(近藤)【講義・演習】									
	8	理論の構築(1)(近藤)【講義・演習】									
	9	理論の構築(2)(近藤)【講義・演習】									
	10	理論の構築(3)(近藤)【講義・演習】									
	11	理論の構築(4)(近藤, 兵藤)【講義・演習】									
	12	理論の構築(5)(近藤, 兵藤)【講義・演習】									
	13	博士論文と理論(1)(近藤, 兵藤)【講義・演習】									
	14	博士論文と理論(2)(近藤, 兵藤)【講義・演習】									
	15	まとめ(近藤)【講義・演習】									
教科書	講義の中で紹介する。										
参考書・参考資料等	随時、提示する。										
事前学習・事後学習	理論について関心をもち、自己学習して講義に臨む。また、各自の博士論文との関連を意識しながら、プレゼンテーションの準備を行い、ディスカッションを各自の博士論文の発展に活かす。										
他の授業との関連	博士課程における講義・演習・論文作成の基盤となる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	毎回のプレゼンテーション&ディスカッションの内容、及び、最終レポートによって、総合的に評価する。フィードバックは、各講義のディスカッションの中で行う。										
オフィスアワー	必要時、メールでご連絡ください。										
備考	※実務経験のある教員:近藤(看護師), 兵藤(看護師)										

看護学発展論(Nursing Policy Development)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	演習、講義
担当教員	●井伊 久美子(II Kumiko)										
授業の目的	わが国の保健医療福祉及び看護の動向を踏まえ、看護政策の立案・提言及び実現・検証を政策形成過程として理解するとともに政策研究の方法論を修得する。この過程を通して、看護学発展を目指した政策研究を展開できる能力を獲得する。										
到達目標	①看護政策の発展過程を実際例から分析的に考察できる。 ②政策研究のプロセスを理解し、看護実践への寄与について説明できる。										
授業の進め方	看護政策の動向及び看護を取り巻く保健医療福祉と労働政策について概観する。政策活動に関する諸理論を学修し、実際の看護政策に関して策定の妥当性、実現の要因、影響検証等を討議し、看護政策研究過程としてまとめる。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	保健医療福祉世策の動向									
	2	わが国及び諸外国の看護を取り巻く保健・医療・福祉の動向と政策的課題を概観する。(1, 2)									
	3	政策関連理論									
	4	政策活動に関する諸理論及び政策立案から評価検証のプロセスについての文献研究を行う。(3, 4)									
	5	諸外国の看護政策									
	6	看護政策の歴史と推移に関して諸外国の事例を検討し、看護学発展との関係を論述する。(5, 6)									
	7	看護政策過程									
	8	現在の看護政策を複数取り上げ、比較検討し、政策形成過程と評価方法について討議する。(7, 8)									
	9	課題討議									
	10	看護における政策研究の方法について、既存の看護政策や策定した政策提言を素材に									
	11	討議し、看護政策策定の妥当性、政策実現の要因分析、政策活動の評価検証を一連の									
	12	プロセスとしてして論述する。(9~13)									
	13	まとめ									
	14	政策形成過程に加え評価結果の活かし方を看護政策研究過程としてまとめを行い、									
	15	看護学発展への寄与について考察する。(14, 15)									
教科書	「看護制度と政策」法政大学出版局、「私たちの拠りどころ保健師助産師看護師法」日本看護協会出版会										
参考書・参考資料等	随時、紹介する。										
事前学習・事後学習	教科書の通読、課題に対する自己学習										
他の授業との関連	選択する専門科目や特別研究に関連した看護政策課題を選定する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	presentation60%、レポート40%により総合的に評価する。 評価については、疑問等受け付ける期間を設け、評価について説明する。										
オフィスアワー	希望者は事前に相談日を予約し日時を決定して行う。										
備考	※実務経験のある教員:井伊(保健師)										

看護研究方法特論 (Nursing Research Methods)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	演習・講義
担当教員	●片山 陽子 (KATAYAMA Yoko)										
授業の目的	既存の研究方法の理解及び看護学独自の方法論開発にも関心を向けつつ、博士論文の作成に必要な研究方法の選択とその適用に不可欠な理論・技術の修得を目的とする。										
到達目標	①各研究方法が産出する理論の特性を批評できる。 ②研究遂行での知識・技術適用の実際を、事例を通して説明できる。 ③各自の関心課題における研究デザインの概要がイメージできる。										
授業の進め方	研究の背景や概念の明確化の必要性認識の基、論文のクリティークやプレゼンテーション、討論等を通して、新知見を産出する研究プロセスを確認し、各自の関心課題に適用する方法論の理解と技術の選択を各自の専門分野の中に位置づけて検討する。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	デザイン批評の視点とその意義の確認①(片山)【講義】									
	2	デザイン批評の視点とその意義の確認②(片山)【演習】									
	3	リサーチクエスションの洗練(片山)【講義・演習】									
	4	総説論文及び概念分析の必要性の理解(片山)【講義】									
	5	記述理論構築と質的研究方法の分析と評価①(片山)【講義】									
	6	記述理論構築と質的研究方法の分析と評価②(片山)【演習】									
	7	説明・予測理論構築と量的研究法の分析と評価①(片山)【講義】									
	8	説明・予測理論構築と量的研究法の分析と評価②(片山)【演習】									
	9	規定理論構築と量的研究法の分析と評価①(片山)【講義】									
	10	規定理論構築と量的研究法の分析と評価②(片山)【演習】									
	11	看護学に貢献する研究方法論開発の必要性(片山)【演習】									
	12	混合研究法の理解:方法論の分析と評価(非常勤講師)【講義】									
	13	混合法の理解:適用(非常勤講師)【演習】									
	14	Mixed methods systematic reviewと質的研究のメタシンセシス時(片山)【講義・演習】									
	15	研究における倫理的配慮(片山)【講義・演習】									
教科書	「看護研究入門—評価・統合・エビデンスの生成」バーンズ&グローブ(エルゼビア・ジャパン)										
参考書・参考資料等	授業の進行に合わせ、看護関連の邦文・英文論文を中心に、保健・医療関係の論文も含めて適宜、紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習:ガイダンスでの指定や前週に配布される資料を熟読し質問を準備する。 事後学習:授業の学びを自己の研究課題の文脈に位置付けて理解を拡大・深化させる。										
他の授業との関連	看護理論学と相補関係を有し後続科目での討論や批評対応に於ける実証的・合理的論述に活かされる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業でのプレゼンテーション及び討論での発言内容(70%)、課題レポート(30%)で評価する。評価基準は、課題探求力、説明力、論理的思考力である。評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に説明する。										
オフィスアワー	適宜対応する。事前にメールで確認すること。										
備考	修士課程での研究方法の学習を前提にして授業や討論を進める。各自、自主的・主体的に授業に参加し、積極的に討論すること。 *実務経験のある教員 片山(保健師・看護師)										

基盤看護科学特論(Nursing Science for Fundamental)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	演習、講義
担当教員	●小野 美穂(ONO Miho), 呉 小玉(WU Xiaoyu), 筒井 邦彦(TSUTSUI Kunihiko), 比江島 欣慎(HIEJIMA Y oshimitsu)										
授業の目的	地域包括ケアに向けて看護職の役割拡大と看護実践の場が多様化するなかで、新たな看護の創造・開発に向けた研究の動向や課題を検討し、その方向性を探求する。										
到達目標	①看護に関する主要な理論を分析することができる。 ②看護現場における問題および課題が抽出できる。 ③問題および課題に関連する国内外の文献を系統的に検討し総括できる。 ④看護専門職としての看護の発展に向けての開発課題を考察することができる。										
授業の進め方	講義で得た知識を手がかりに学生自身が理論の分析や文献検討を行いプレゼンテーションし、その内容に基づいてディスカッションし、学びを深めていく。授業内容やスケジュールに関しては学生の関心や反応によって漸次修正する。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	探究する看護に関する諸理論の概観①(小野・呉)【講義・討論】									
	2	探究する看護に関する諸理論の概観②(小野・呉)【演習】									
	3	探究する看護に関する主要理論の分析①(小野・呉)【講義・討論】									
	4	探究する看護に関する主要理論の分析②(小野・呉)【演習】									
	5	探究する看護に関する研究の動向①(小野・呉)【演習】									
	6	探究する看護に関する研究の動向②(小野・呉)【演習】									
	7	探究する看護に関する研究論文のクリティーク①(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	8	探究する看護に関する研究論文のクリティーク②(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	9	探究する看護に関する研究論文のクリティーク③(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	10	探究する看護に関する研究論文のクリティーク④(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	11	探究する看護に関する研究論文のクリティーク⑤(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	12	探究する看護に関する研究論文のクリティーク⑥(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	13	研究課題と研究方法の探求①(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	14	研究課題と研究方法の探求②(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
	15	研究課題と研究方法の探求③(小野・呉・筒井・比江島)【演習】									
教科書	使用しない。										
参考書・参考資料等	参考文献は随時提示する。										
事前学習・事後学習	事前学習: 自分の関心テーマに沿った文献を精読する。プレゼンテーション資料を作成する。 事後学習: 授業の中で指摘されたことや疑問に思ったことについて調べ直し検討する。										
他の授業との関連	「実践開発看護学特別演習」「看護学特別研究」の基盤になる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	○成績評価の対象: 授業参加度(20%)、プレゼンテーション資料(40%)、レポート(40%) ○成績評価のフィードバック: 前期終了時に結果を伝える。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。										
備考	※実務経験のある教員: 小野(看護師)、呉(看護師)、筒井(医師)										

地域在宅看護科学特論 (Nursing Science for Community-Health Nursing)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●片山 陽子(KATAYAMA Yoko)、辻よしみ(TSUJI Yoshimi)、岡田 麻里(OKADA Mari)										
授業の目的	地域包括ケアシステム構築のなかで、在宅療養者を含めた地域で生活する人々の複数が多様な健康課題に応える新たな看護サービス・看護ケアシステムに関連する理論・概念を学問的に探究・分析する。また、社会情勢や制度・政策の動向および地域特性を考慮し看護を展開する上での今日的課題や問題を取り上げ、関連する国内外の文献のクリティークを行い、研究課題を明確にする。研究課題の解決に向けた方法論を多角的に検討し、人々の健康生活のQOL向上に寄与する創造的看護アプローチを展望する。										
到達目標	①地域包括ケアシステム構築における7在宅療養者を含む地域住民の健康課題を説明できる。 ②地域包括ケアシステムの中で求められる看護および看護システムに関連する理論・概念を説明できる。 ③社会情勢を踏まえた地域在宅看護の今日的課題を説明できる。 ④地域在宅看護の今日的課題に関連する国内外の研究をクリティークし研究課題を明確に示せる。 ⑤研究課題の解決に向けた方法論を多角的に検討できる。 ⑥研究課題解決によって人々の健康生活に寄与できる創造的看護アプローチを展望できる。										
授業の進め方	講義で得た知識を手がかりに、国内外の文献クリティークを行い、これをレポートにしてプレゼンテーションする。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	1.理論・概念 1)地域在宅看護の基盤となる「プライマリーヘルスケア」「ヘルスプロモーション」の理解(辻)【講義・演習】									
	2	2)地域診断モデル「コミュニティアズパートナーモデル」「PRECEDE-PRECEEDモデル」のクリティーク(辻)【講義・演習】									
	3	3)保健計画策定推進過程に関する理論・概念(辻)【講義・演習】									
	4	4)地域ケアシステム開発に関する理論・概念(片山・辻)【講義・演習】									
	5	5)在宅ケアに関する理論・モデル(片山)【講義・演習】									
	6	2.研究の動向と関連文献のクリティーク									
	7	6)諸外国のヘルスプロモーションの動向とわが国の政策動向(辻)【演習】									
	8	7)在宅ケアの動向とわが国の政策動向(片山)【演習】									
	9	8)保健活動の質評価に関する研究の動向と課題(辻)【演習】									
	10	9)在宅ケアの質評価に関する研究の動向と課題(片山)【演習】									
	11	10)地域看護・公衆衛生看護に関する文献レビューと研究課題の抽出(辻)【演習】									
	12	11)在宅ケアに関する文献レビューと研究課題の抽出(片山)【演習】									
	13	12)課題解決に向けた施策化・施策提言及び研究方法の検討(片山・辻)【演習】									
	14	3.研究課題と研究方法の検討									
	15	13)地域のケアシステムやケアマネジメントの構築に関する研究方法の討論(片山・辻)【演習】 14)同上(片山・辻)【演習】 15)同上(片山・辻)【演習】									
教科書	特に使用しない。資料を配布する。										
参考書・参考資料等	随時、紹介する。										
事前学習・事後学習	研究課題対応する理論・モデルを学習しておく 研究課題に対応した研究方法が決まれば研究計画書を再検討し研究計画書を修正する										
他の授業との関連	実践開発看護学演習										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価:プレゼンテーション内容(50%)、レポート(30%)、自己の課題の取り組み状況(20%)により総合的に評価する。 評価基準:課題の抽出と根拠(課題抽出力・読解力)、レポートの論理的展開(論理展開力・説明力・論理一貫性)、プレゼンテーション力・議論参加の主体性 学術セミナー、研究計画書の審査の節目節目で面接し成果評価を実施するとともに、研究論文作成過程において、随時疑問質問に対応する。フィードバック:プレゼンテーションは実施後に伝える。またレポート・取り組みは評価表に基づいて評価した内容を日時を提示した上でフィードバックする。										
オフィスアワー	随時対応する。										
備考	*実務経験のある教員:片山(保健師・看護師)、辻(保健師・看護師)										

精神保健看護科学特論 (Nursing Science for Mental Health)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	則包 和也(NORIKANE Kazuya)、土岐 弘美(TOKI Hiromi)										
授業の目的	近年、精神保健に関する社会のニーズが急激に高まり、求められる支援の内容や質が大きく変化している。技術的には、科学的な知見を根拠とした関わりや高度なコミュニケーション技術を用いたアプローチが提唱され、社会的には、精神障害者の地域生活を踏まえた地域包括ケアシステムの構築について取り組まれるようになっている。このような現状で、精神保健看護実践について、国内外の文献を通して学際的に探究し、研究成果の分析によって、課題を抽出し、新たな精神保健看護に関する知識や実践モデルの創出につなげる。										
到達目標	①文献検討により、精神保健看護実践に関する様々な介入効果を体系化する。 ②エビデンスに基づく精神保健看護実践から、自己の看護哲学を探求する。 ③精神保健看護に関するテーマについて、研究の動向をまとめ、課題を抽出する。 ④抽出した研究課題解決のための方法を考案し、実践に繋げる工夫をする。										
授業の進め方	講義を基に、国内外の文献等のクリティークを踏まえてレポートを作成する。その内容を基に資料を作成して、プレゼンテーションを行い、討議する。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1~4	I 精神保健看護実践を推進する理論と方法 1. 人間関係論、認知行動の理論などの理解の深化①(則包)【講義・討議】 2. 人間関係論、認知行動の理論などの理解の深化②(則包)【講義・討議】 3. 精神保健看護の視点から人間関係論や認知行動論を理解し、看護に活かす方法の検討①(則包)【講義・討議】 4. 精神保健看護の視点から人間関係論や認知行動論を理解し、看護に活かす方法の検討②(則包)【講義・討議】									
	5~10	II 精神保健看護実践とエビデンス 5. エビデンスに基づく精神保健看護実践に関する国内外の主要論文の抄読①(則包)【講義・討議】 6. エビデンスに基づく精神保健看護実践に関する国内外の主要論文の抄読②(則包)【講義・討議】 7. 精神保健看護実践に関する心理学的・生理学的な効果に関する論文の抄読(則包)【発表・討議】 8. 看護師が介入する認知行動療法の心理学的・生理学的な効果について①(則包)【講義・討議】 9. 看護師が介入する認知行動療法の心理学的・生理学的な効果について②(則包)【講義・討議】 10. エビデンスに基づく精神保健看護から自己の看護哲学を考察する(則包)【発表・討議】									
	11~15	III 近年の研究の動向と課題の抽出 11. 精神保健に関する近年のテーマについて研究成果をまとめて課題を抽出①(則包)【発表・討議】 12. 精神保健に関する近年のテーマについて研究成果をまとめて課題を抽出②(則包)【発表・討議】 13. 抽出した課題について、新たな精神保健看護実践に関する知識や技術を展望(則包)【発表・討議】 14. 研究課題に沿った研究方法の検討①(則包)【発表・討議】 15. 研究課題に沿った研究方法の検討②(則包)【発表・討議】									
教科書	適宜、提示する。										
参考書・参考資料等	適宜、提示する。										
事前学習・事後学習	事前学習:人間の行動や振舞いに関する事象に興味関心をもって、情報収集を行う。 事後学習:理論やモデルを応用して、独自の看護実践とは何かについて考え続ける。										
他の授業との関連	実践開発看護学特別演習、看護学特別研究に発展する科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	プレゼンテーション資料(内容、構成、レイアウト等)30%、レポート(内容、構成、形式の遵守等)40%、課題への取り組み(態度、教員とのコミュニケーション等)30%によって、総合的に評価する。 最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜対応するが、事前にメール等での連絡が必要。										
備考	* 実務経験のある教員 則包(看護師)										

療養支援看護科学特論 (Nursing Science for Adult and Senior)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	演習、講義
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko), 岩本真紀(IWAMOTO Maki)										
授業の目的	あらゆる健康レベルにある人のQOLの向上をめざし、新たなケアの創出、看護実践の哲学的基盤の構築、看護実践を支える学体系の構築、看護実践の向上を体現するシステムの構築について、探求する。加えて、各自の博士論文の基礎となる理論・研究方法論についても探求する。										
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. より健康的に生きることを支える理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>2. 生命の危機的状況にある人とその重要他者を支える理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>3. 病いと共に生きる人とその重要他者を支える理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>4. 障害をもって生きる人とその重要他者を支える理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>5. 人生の最終段階を生きる人とその重要他者を支える理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>6. 高齢者の特異性を考慮したケアを支える理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>7. ケアーギバーへの支援を支える理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>8. 病いや障害を有する人を支える社会システムに関する理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>9. 看護実践を支える哲学的基盤となる理論・研究の動向について説明できる。</li> <li>10. ケアの創出に関する研究手法について説明できる。</li> <li>11. 学体系の構築に関する学術的手法について説明できる。</li> <li>12. 各自の博士論文の生成に必要な理論・研究方法について説明できる</li> </ol>										
授業の進め方	授業目的・目標に沿って、プレゼンテーション&ディスカッションを行う。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	より健康的に生きることに関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	2	生命の危機的状況に関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	3	病いと共に生きることに関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	4	障害をもって生きることに関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	5	人生の最終段階を生きることに関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	6	高齢者の特異性を考慮したケアに関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	7	ケアーギバーへの支援に関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	8	病いをもつ人を支える社会システムに関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	9	看護実践を支える哲学的基盤に関する理論・研究の動向(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	10	ケアの創出に関する研究手法(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	11	学体系の構築に関する学術的・学際的手法(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	12	各自の博士論文の生成に必要な理論・研究方法(1)(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	13	各自の博士論文の生成に必要な理論・研究方法(2)(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	14	各自の博士論文の生成に必要な理論・研究方法(3)(近藤, 岩本)【講義・演習】									
	15	まとめ(近藤, 岩本)【講義・演習】									
教科書	必要時、紹介する。										
参考書・参考資料等	必要時、紹介する。										
事前学習・事後学習	博士課程で期待される能力を、念頭に置きながら講義に参加する。										
他の授業との関連	演習でのプレゼンやピアレビューでの討論・批評対応を準備し、完成度の高い研究の始点となる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	各回のプレゼンテーション・ディスカッション内容(80%)、最終レポート(20%)										
オフィスアワー	必要時、メールでご連絡ください。										
備考	※実務経験のある教員:近藤(看護師)岩本(看護師)										

次世代育成看護科学特論(Nursing Science for Child,Family and Women)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	演習(20時間) 講義(10時間)
担当教員	●植村 裕子(UEMURA Yuko)、枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)										
授業の目的	生涯を通じた女性及び親子とその家族の健康生活支援に関連する課題を取り上げ、新たな看護実践方法の開発につながる研究課題を明確にする。										
到達目標	①次世代育成看護領域における研究の動向について説明できる。 ②次世代育成看護領域における研究課題について説明できる ③自己の研究課題に関連する論文のクリティークができ、新たな課題を発見し説明できる。 ④次世代育成看護領域における看護実践方法の開発に向けた方法論について説明できる。										
授業の進め方	学生の関心あるテーマに関連した論文をクリティークし、自己の研究課題について焦点化を図れるようにする。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1～3	次世代育成に関する理論とモデル概説(枝川、植村)【講義】 ・女性中心のケア/家族中心のケア(植村) ・助産師主導継続ケア(植村) ・妊娠期～育児期における愛着形成、母親役割獲得に関連する理論(植村) ・プレコンセプションヘルスに関連する理論や支援モデル(植村) ・子どもの育児に関連する理論や支援モデル(枝川)									
	4～8	次世代育成に関する理論とモデル総合ディスカッション(枝川、植村)【演習】 ・興味ある論文レビューと発表・討論									
	9～13	次世代育成に関連する課題を抽出(枝川、植村)【演習】 ・CQの設定と論文レビューと現時点での結論									
	14～15	総括(枝川、植村)【演習】 現時点での課題研究テーマ 総合討論【演習】									
教科書	なし										
参考書・参考資料等	適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	到達目標に対応した各単元での課題について学習する。学習内容は資料として整理しプレゼンテーション、討論を行い、新たな学習課題の発見に繋げられる事後学習を行う。										
他の授業との関連	専門共通科目「看護研究方法特論」の単位取得後に履修することが望ましい。										
成績評価方法・基準・フィードバック	【フィードバック】各授業で学生に対して投げかけた課題に関しては、その時間内にフィードバックする。 【形成評価80%】毎回の授業における発言や、討論内容を評価する。 【総括評価20%】15回目の総括時に「課題研究として取り組みたいテーマ」と題して提出するレポートを課題の焦点化、論理的な構成、文献の引用、レポート体裁の視点で評価する。										
オフィスアワー	研究室31(植村) 事前にメールで連絡をして、日時の予約を調整する。 uemura@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	様々な課題について、目的意識と研究心を持ち、主体的に考究し、深く考えようとする姿勢を期待する。 ※実務経験のある教員:枝川(看護師)、植村(助産師)										

実践開発看護学特別演習 (Seminar in Development of Nursing Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	演習
担当教員	片山 陽子 (Yoko Katayama)、近藤 真紀子 (KONDO Makiko)、辻 よしみ (Yoshimi Tuji)、小野美穂 (ONO Mi ho)、則包 和也 (NORIKANE Kazuya)、呉 小玉 (WU Xiaoyu)、筒井 邦彦 (TSUTSUI Kunihiko)、比江島 欣慎 (HIEJIMA Yoshimitsu)、枝川 千鶴子 (EDAGAWA Chizuko)、植村 裕子 (UEMURA Yuko)、岩本 真紀 (IWAMOTO Maki)、岡田 麻里 (OKADA Mari)、土岐 弘美 (TOKI Hiromi)、										
授業の目的	看護実践に役立つ新たなモデルの創出・開発に向けて、研究課題に関する文献検討ならびに課題の検討、保健医療及び看護の制度・政策との関連、課題解決のための方法論についてプレゼンテーションを行い、ピアレビューを受ける。研究の意義について、看護学及び看護実践の発展への重要性と妥当性、独創性と新規性、実践の有用性、地域や組織の看護実践及び看護政策への波及効果の検討の点から明確にする。さらに博士論文としての研究目標を明確にして研究方法の妥当性と実現可能性についても検討する。他の特論を選択している学生及び当該学生の研究指導教員を含めた授業担当教員全員を対象にプレゼンテーションを行い、発展的な討論を通して高度な創造・開発能力を涵養する。										
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 広い文献検討のもと、学術的意義がある研究課題を導く。</li> <li>② 研究課題に適した研究方法を選択し、科学的根拠があり妥当性のある研究方法を使用する。</li> <li>③ 学術的重要性・妥当性・独創性・新規性・有用性・波及効果を期待できる研究計画書を完成する。</li> <li>④ 研究の実現可能性を予測する。</li> </ul>										
授業の進め方	ゼミナール形式で、学生が研究の進捗状況や課題をプレゼンテーションし、他の特論を選択している学生及び当該学生の研究指導教員を含めた授業担当教員全員と討論しながら研究課題を修正し、完成度の高い研究計画書の作成を目指す。そのプロセスにおいて、企画構成力、説明説得力、表現力、発言力等が発揮できるように取り組む。 当該学生の研究指導教員は、研究課題に関する文献検討ならびに課題の検討、課題解決のための方法論の指導をする役割を持つ。授業担当教員は、より完成度が高い研究計画書の作成ができ、学生が授業目標を達成できるように、研究の実践的有用性と実現可能性、独創性と新規性等の観点から本授業において質問やアドバイスを発展的に行う。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1-3	I. 文献検討と課題の検討 1. 文献検討と課題の検討についてプレゼンテーションとピアレビュー① 2. 文献検討と課題の検討についてプレゼンテーションとピアレビュー② 3. 文献検討と課題の検討についてプレゼンテーションとピアレビュー③									
	4-6	II. 方法論の検討 1. 課題解決のための方法論についてプレゼンテーションとピアレビュー① 2. 課題解決のための方法論についてプレゼンテーションとピアレビュー② 3. 課題解決のための方法論についてプレゼンテーションとピアレビュー③									
	7-10	III. 研究の意義の検討 (重要性、妥当性、独創性、新規性、有用性、波及効果) 1. 研究課題の看護の発展への重要性と妥当性についてプレゼンテーションとピアレビュー 2. 研究課題の独創性と新規性についてプレゼンテーションとピアレビュー 3. 研究成果の実践的有用性と波及効果についてプレゼンテーションとピアレビュー 4. 研究成果と政策提言との関連									
	11-12	IV. 研究の実現可能性の検討 1. 研究目標の設定とデータ収集分析の予測 2. 研究経過における倫理的問題の予測と対応									
	13-14	V. 修正案の確認 1. 研究計画の修正案の検討① 2. 研究計画の修正案の検討②									
	15	VI. まとめ 1. 総括									
教科書	関連資料を適宜、講義の中で紹介する。										
参考書・参考資料等	随時、提示する。										
事前学習・事後学習	討議が順調に進行するために、徹底した事前学習をすること。										
他の授業との関連	研究の基盤的知識を養う専門共通科目、専門科目をさらに発展させ、看護学特別研究につなげる科目である。										
	【成績評価方法・基準】授業の目標達成状況をみる評価基準 [以下のものを含む: 課題の明確さ(20%); 計画書の										

成績評価方法・基準・ フィードバック	適格性(20%);プレゼンテーション(30%);提案力(30%)]にそって総合的に評価する。 【フィードバック】提出物にコメントを添付しフィードバックする。 * 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ、評価を受けられません。
オフィスアワー	適宜、対応する。
備考	事前に提示する課題について、自らの考えを明確にして授業に臨むこととする。

看護学特別研究(Advanced Research in Nursing)													
必修・選択の区別	必修	学年次		学期		通年		単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	片山 陽子(KATAYAMA Yoko)												
授業の目的	看護学の学術的発展と看護実践の質向上に寄与する博士論文を完成する。作成過程において、看護学における重要な知見を見出し、実践の発展性・有用性に貢献するために必要な研究の厳密性の保証について学び、研究過程を通して自律した研究活動が遂行できる能力を育成する。												
到達目標	1. 看護学の学術的重要性、実践への有用性、新規性・創造性を有する学術論文が作成できる。 2. 研究目的が明確であり、そのために必要な厳密性が保証された研究計画が立案できる。 3. 文献研究及び科学的方法論の探究を基盤とした研究過程が遂行でき、副論文が作成できる。 4. 研究過程を通して倫理的思考と研究者に必要な基本姿勢を獲得できる。 5. 発表および審査において、自己の研究成果を公表でき学術的・臨床的価値を示すことができる。												
授業の進め方	ゼミナール形式(個別及び在宅看護学領域ゼミナール)												
	回	内容・教員・形式等											
授業スケジュール	1~10 11~20 21~30 31~40 41~60 61~70 71~80 81~90	修士論文の再分析、RQ、RQの明確化 文献検討・概念分析・副論文の作成 研究方法論の明確化と適用性の検討 研究計画書の作成 データ収集 データ分析 論文執筆 論文発表・修正											
教科書	適宜、紹介する。												
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。												
事前学習・事後学習	ゼミナールの進捗状況に応じて、必要な内容の事前・事後学習を実施する。												
他の授業との関連	看護学特論・演習など履修科目と連動している。												
成績評価方法・基準・フィードバック	評価方法と基準：ゼミナールでのプレゼンテーション内容と討議内容(主体性・論理性・説明力)(20%)、博士論文の作成過程の取り組み状況(主体性・論理的展開力・遂行力)(20%)博士論文の完成度(論旨一貫性・学術的重要性・有用性・新規性・創造性)(60%) フィードバックは、期間を設定して実施する。												
オフィスアワー	適宜、メールで日程調整した上で対応する。												
備考	* 実務経験のある教員 片山(保健師・看護師)												

看護学特別研究 (Advanced Research in Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数		授業形態	演習
担当教員	近藤真紀子 (KONDO Makiko)										
授業の目的	看護学の発展に貢献する新奇性・独創性・学術性の高い博士論文を完成する。この過程を通して、自律して研究活動を行う研究者としての能力を育成する。										
到達目標	1.新規性・独創性・発展性・学術性の高い研究テーマを設定できる。 2.研究の意義と背景を明確にし、研究目的を絞り込むことができる。 3.研究デザインを明確にし、緻密な研究計画書を作成できる。 4.実現可能性を予測し、研究過程を遂行することができる。 5.博士論文を完成し、審査に耐え得る。										
授業の進め方	ゼミナール										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1-7 8-15 16-17 18-22 23-25 26-35 36-40 41-60 61-70 71-80 81-90	研究課題の明確化 文献検討 研究の問いと研究デザインの明確化 研究方法論の検討 フィールド確保とフィールド調整 研究計画書の作成 倫理審査に向けての準備と審査結果への対応 データ収集 データ分析 論文執筆 審査									
教科書	必要時、紹介する。										
参考書・参考資料等	必要時、紹介する。										
事前学習・事後学習	院生自ら、主体的・自主的に研究過程を進める。										
他の授業との関連	博士課程に配置される様々な科目と密接に関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	博士論文の完成度(50%)・博士論文の完成までの取り組み方(50%)によって評価する。論文の完成度は、博士論文の審査基準に準じて行う。必要なフィードバックはその都度行う。										
オフィスアワー	適宜、対応する。										
備考											

看護学特別研究 (Advanced Research in Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	小野 美穂 (ONO Miho)										
授業の目的	<p>これまで学修した専門共通科目、専門科目、演習科目の学修成果を統合させ、看護学特別研究では、専門分野における自らの研究課題を明確に決定し、自らの研究成果によって実践科学である看護学の体系化に貢献する研究力を涵養し、新規かつ独創的な研究計画書を立案する。この過程を通して、自律的に完成度の高い研究計画書を立案する能力を自ら育成する。そして、研究倫理に沿って研究過程を推進しながら、博士論文に関連する副論文を学術雑誌に投稿し、査読を受けて論考する能力を修得し、学術雑誌が求める水準に到達した論文の掲載を達成する。また、研究過程に関する学術セミナーでのプレゼンテーション、討議、研修を通して博士論文完成に向けて課題を明確にする。この過程を通して、自律した研究者としての研究力、研究成果を論文作成し発表する能力を自ら育成する。</p> <p>最終的に、看護学の発展に貢献する新規性・独創性・波及効果の高い博士論文を完成する。この過程を通して、看護学を体系化するための看護学研究を自律して推進できる能力、看護の質向上に向けての看護実践の変革や看護政策に貢献できる能力を自ら育成する。</p>										
到達目標	<p>①学術的重要性・新規性・独創性を有し、看護実践を進展させる有用性と波及効果が期待できる博士論文を創造する。</p> <p>②研究目的が明確で、方法を十分に練った研究を計画する。</p> <p>③倫理的配慮は、法令等に従い、所定の手続き・対策を講じる。</p> <p>④明確で一貫性がある博士論文を論述する。</p> <p>⑤博士論文に関連する副論文を投稿し、学術雑誌が求める水準に到達した論文掲載を達成する。</p> <p>⑥博士論文発表会で、発表や質疑応答の回答を適切に述べる。</p>										
授業の進め方	<p>学生は、次頁に示す看護学領域毎の教員研究テーマ一覧を参考に、自分の研究課題に応じた専門的な研究指導が受けられるようにする。また、自ら研究フィールドを開拓し、学生のプレゼンテーションを中心に、教員と討議・検討しながら進める。</p>										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	I. 研究の構想、博士後期課程の研究水準の明示 1. 修士論文における研究の振り返り、博士論文との関連性									
	2-11	II. 研究課題 1. 文献検討・研究課題の明確化 2. 研究課題の概念分析・文献検討									
	12-16	III. 研究計画書作成 1. 研究課題と概念枠組み 2. 研究デザインと方法の検討									
	17-18	IV. 第1回学術セミナーでの発表と討議 1. 研究デザインと方法の決定									
	19-22	V. 研究計画書の自己評価と改善 1. 研究計画書の修正・改善									
	23-35	VI. 研究計画書の完成 1. 研究計画書作成過程の自己評価									
	36-38	VII. 研究計画書審査の準備 1. 研究計画書審査の準備 2. 研究計画書の吟味と洗練									
	39-40	VIII. 倫理審査申請書の準備 1. 研究計画書作成後の倫理審査申請の準備									
	41-53	IX. 研究計画書に則り研究の実施									
	54-55	X. 第2回学術セミナーでの発表と討議 1. 看護実践現場等を中心としたデータ収集の進捗状況まとめ 2. データ分析の進捗状況まとめ整理									
	56-58	XI. 学術セミナー後の自己評価 1. 発表に対する評価を受け改善 2. 研究過程自己評価と課題の明確化 3. 博士論文に関連する副論文の作成									
	59-61	XII. 分析結果の論述									
	62-66	XIII. 研究目的とデータ分析方法 1. 目的と分析の妥当性、分析と解釈									
	67-72	XIV. 研究目的と分析結果									

	73-78	1. 分析結果の論述の完成 X V. 結果と考察と結論
	79-80	1. 考察と結論の論述の完成 2. 目的、方法、結果の整合性の確認 X VI. 第3回学術セミナーでの発表と討論
	81-86	1. 博士論文作成・完成 X VII. 博士論文予備審査
	87-88	1. 博士論文審査の準備 X VIII. 博士論文審
	89-90	X IX. 博士論文発表、博士論文完成 1. 論文の内容を要点に基づいて発表 2. 全過程の自己評価と長期的展望に立った課題の明確化
教科書	関連資料を講義の中で適宜、紹介する。	
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。	
事前学習・事後学習	研究の完成に向かい、解決すべき課題を事前学習で明確にして授業に臨むこと。	
他の授業との関連	専門共通科目及び特論と実践開発看護学特別演習による学修成果を深化・発展させ、看護学特別研究で博士論文を完成させる。	
成績評価方法・基準・フィードバック	討論の内容(10%)、研究計画書の作成過程と内容(20%)、研究遂行能力(30%)、博士論文の新規性、独創性、波及効果(40%)を総合して評価する。	
オフィスアワー	適宜、対応する。	
備考	博士後期課程における水準を担保した博士論文を作成する。	

看護学特別研究 (Advanced Research in Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	則包 和也 (NORIKANE Kazuya)										
授業の目的	これまでの学修で得た知識、情報、技術等の統合し、研究テーマに沿った文献レビュー、研究計画や実施して得られた結果をまとめあげて、検討を重ねていく。その際、データの集計・分析方法について学ぶとともに、精神看護に特徴的な倫理的課題について見識を深め、遵守する必要性と方法について検討し実施できることを目指す。それらの経験と学びを、研究論文として執筆する能力と、プレゼンテーション等で効果的に伝える能力を修得する。これらることによって、精神看護において独創的かつ創造的なアプローチを提案することができるように自律的に進めていく。										
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護学として意義のある知見を導き出すことができる。</li> <li>・妥当性のある研究計画書を作成し、目的達成に必要な研究方法を選択することができる。</li> <li>・対象者や研究方法について、適切かつ十分な倫理的配慮を行うことができる。</li> <li>・論旨が明確で一貫性のある博士論文を作成することができる。</li> </ul>										
授業の進め方	講義、および、ディスカッションや発表を交えながら進めていく。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1 2～11 12～16 17～21 22～23 24～35 36～38 39～52 53～73 74～80 81～90	ガイダンス 研究課題の明確化: 要約した文献レビューの概要と博士論文との位置づけ(則包)【演習】 研究計画書の吟味: 作成した研究計画書をもとにした発表とディスカッション(則包)【演習】 学内での発表準備(則包)【演習】 学内での発表(則包)【演習】 発表で得た課題と助言の検討(則包)【演習】 倫理審査申請書の作成(則包)【演習】 研究実施: 進捗状況についての発表と助言を参考にした研究の深化(則包)【演習】 博士論文の執筆の継続(則包)【演習】 博士論文の完成: 研究成果の発表と、助言を参考にした論文執筆(則包)【演習】									
教科書	関連資料を講義の中で適宜、紹介する。										
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。										
事前学習・事後学習	講義内容に関連した資料によって、事前学習を行うこと。学習後は、レポート作成によって復習する。										
他の授業との関連	精神保健看護科学特論と関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	討議(内容、論理性)20%、研究遂行能力(計画の遂行度、倫理的配慮の実施程度)20%、論文の形式の遵守(30%)、論文の内容(30%)で評価する。 最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜対応するが、事前にメール等で連絡すること。										
備考	* 実務経験のある教員 則包(看護師)										

看護学特別研究(Advanced Research in Nursing)													
必修・選択の区別	必修	学年次		学期		通年		単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	呉 小玉(Wu Xiaoyu)												
授業の目的	高い倫理的素養と独立した研究遂行能力を備えた研究者・教育者の育成を目指す。学生は専門分野における自らのオリジナルな研究課題を明確に決定し、独創的な研究計画書を立案する。この過程を通して、自律的に完成度の高い研究計画書を立案する能力を自ら獲得する。また、研究倫理に沿って研究過程を推進しながら、博士論文に関連する副論文を学術雑誌に投稿し、査読を受けて論考する能力を修得し、学術雑誌が求める水準に到達した論文の掲載を達成する。また、研究過程に関する学術セミナーでのプレゼンテーション、討議、研修を通して博士論文完成に向けて課題を明確にする。最終的に、看護学の発展に貢献する新規性・独創性・波及効果の高い博士論文を完成する。この過程を通して、看護学を体系化するための推進能力、看護の質向上に貢献できる能力を自ら獲得する。												
到達目標	① 研究目的が明確で、方法を十分に練った研究を計画する。 ② 倫理的配慮は、倫理綱領等に従い、所定の手続き・対策を講じる。 ③ 博士論文に関連する副論文を投稿し、学術雑誌が求める水準に到達した論文掲載を達成する。 ④ 学術的重要性・新規性・独創性を有し、看護実践を進展させる有用性と波及効果が期待できる博士論文を創造する。												
授業の進め方	学生は自分の研究課題に応じた専門的な研究指導が受けられるようにする。また、自ら研究フィールドを開拓し、学生のプレゼンテーションを中心に、教員と討議・検討しながら進める。												
	回	内容・教員・形式等											
授業スケジュール	1	ガイダンス											
	2-11	修士論文や今までの研究の振り返り、博士論文との関連性を考案する研究課題											
	12-16	1. 文献検討・研究課題の明確化 2. 研究課題の概念分析・文献検討											
	17-18	研究計画書作成											
	19-22	1. 研究課題と概念枠組み 2. 研究デザインと方法の検討											
	23-35	第1回学術セミナーでの発表と討議 1. 研究デザインと方法の決定											
	36-38	研究計画書の自己評価と改善 1. 研究計画書の修正・改善											
	39-40	研究計画書の完成 1. 研究計画書作成過程の自己評価											
	41-53	研究計画書審査の準備 1. 研究計画書審査の準備 2. 研究計画書の吟味と洗練 倫理審査申請書の準備 1. 研究計画書作成後の倫理審査申請の準備											
	54-55	研究計画書に則り研究の実施 第2回学術セミナーでの発表と討議 1. 看護実践現場等を中心としたデータ収集の進捗状況まとめ 2. データ分析の進捗状況まとめ整理											
	56-58	学術セミナー後の自己評価 1. 発表に対する評価を受け改善 2. 研究過程自己評価と課題の明確化 3. 博士論文に関連する副論文の作成											
	59-61	分析結果の論述 研究目的とデータ分析方法 1. 目的と分析の妥当性、分析と解釈											
	62-66	研究目的と分析結果 1. 分析結果の論述の完成											
	67-72	結果と考察と結論 1. 考察と結論の論述の完成											
	73-78	2. 目的、方法、結果の整合性の確認											

	79-80	第3回学術セミナーでの発表と討論 1. 博士論文作成・完成 博士論文予備審査
	81-86	1. 博士論文審査の準備 博士論文審査
	87-88	博士論文発表、博士論文完成
	89-90	1. 論文の内容を要点に基づいて発表 2. 全過程の自己評価と長期的展望に立った課題の明確化
教科書	なし	
参考書・参考資料等	適宜紹介する	
事前学習・事後学習	事前学習: 研究の進捗において疑問・思考を含み、報告文を討論材料として準備する。 事後学習: 討論で指摘されたことや質問されたことに対して適切に修正を加え、次に進む。自らの研究を遂行する上で必要となることを常に学習する。	
他の授業との関連	これまで学修した専門共通科目、専門科目、演習科目のすべての授業である。	
成績評価方法・基準・フィードバック	【成績評価方法・基準】討論の内容(10%)、研究計画書の作成過程と内容(20%)、研究遂行能力(30%)、博士論文の新規性、独創性、波及効果(40%)を総合して評価する。 【フィードバック】提出されたものはその都度フィードバックを行う。	
オフィスアワー	随時対応する(事前にメールで確認のこと)。 e-mail: u-s@kagawa-puhs.ac.jp	
備考	※看護実践経験のある教員: 呉(看護師)	

看護学特別研究(Advanced Research in Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	筒井 邦彦(TSUTSUI Kunihiko)										
授業の目的	<p>学修した専門共通科目、専門科目、演習科目の学修成果を統合し、専門分野における自らの研究課題を明確にし、自らの研究成果によって実践科学である看護学の体系化に貢献する研究力を錬成し、独自の研究計画書を立案することで、完成度の高い研究計画書を立案する能力を自ら育成する。研究倫理に沿って研究過程を推進し、博士論文に関連する副論文を学術雑誌に投稿し、査読を受けて論考する能力を修得し、学術雑誌が求める水準に到達した論文の掲載を達成する。また、研究過程に関する学術セミナーでのプレゼンテーション、討議、研修を通して博士論文完成に向けて課題を明確にする。この過程を通して、自律した研究者としての研究力、研究成果を論文作成し発表する能力を自ら育成する。</p> <p>看護学の発展に貢献する新規性・独創性・波及効果の高い博士論文を完成することで、看護学を体系化するための看護学研究を自律して推進できる能力、看護の質向上に向けての看護実践の変革や看護政策に貢献できる能力を自ら育成する。</p>										
到達目標	<p>①学術的重要性・新規性・独創性を有し、看護実践を進展させる有用性と波及効果が期待できる博士論文を作成する。</p> <p>②研究目的が明確で、方法を十分に練った研究を計画する。</p> <p>③倫理的配慮は、法令等に従い、所定の手続き・対策を講じる。</p> <p>④明確で一貫性がある博士論文を論述する。</p> <p>⑤博士論文に関連する副論文を投稿し、学術雑誌が求める水準に到達した論文掲載を達成する。</p> <p>⑥博士論文発表会で、発表や質疑応答の回答を適切に述べる。</p>										
授業の進め方	看護学領域毎の教員研究テーマ一覧を参考に、自分の研究課題に応じた専門的な研究指導が受けられるようにする。また、自ら研究フィールドを開拓し、学生のプレゼンテーションを中心に、教員と討議・検討しながら進める。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	I. 研究の構想、博士後期課程の研究水準の明示 1. 今までの研究の振り返り、博士論文との関連性									
	2~11	II. 研究課題 1. 文献検討・研究課題の明確化 2. 研究課題の概念分析・文献検討									
	11~16	III. 研究計画書作成 1. 研究課題と概念枠組み 2. 研究デザインと方法の検討									
	17~18	IV. 第1回学術セミナーでの発表と討議 1. 研究デザインと方法の決定									
	19~22	V. 研究計画書の自己評価と改善 1. 研究計画書の修正・改善									
	23~35	VI. 研究計画書の完成 1. 研究計画書作成過程の自己評価									
	36~38	VII. 研究計画書審査の準備 1. 研究計画書審査の準備 2. 研究計画書の吟味と修正									
	39~40	VIII. 倫理審査申請書の準備 1. 研究計画書作成後の倫理審査申請の準備									
	41~53	IX. 研究計画書に則り研究の実施									
	54~55	X. 第2回学術セミナーでの発表と討議 1. 看護実践現場等を中心としたデータ収集の進捗状況まとめ 2. データ分析の進捗状況まとめ整理									
	56~58	XI. 学術セミナー後の自己評価 1. 発表に対する評価を受け改善 2. 研究過程自己評価と課題の明確化 3. 博士論文に関連する副論文の作成									
	59~61	XII. 分析結果の論述									
	62~66	XIII. 研究目的とデータ分析方法 1. 目的と分析の妥当性、分析と解釈									
	67~72	XIV. 研究目的と分析結果 1. 分析結果の論述の完成									
	73~78	XV. 結果と考察と結論									

	<p>1. 考察と結論の論述の完成</p> <p>2. 目的、方法、結果の整合性の確認</p> <p>79~80 X VI. 第3回学術セミナーでの発表と討論</p> <p>1. 博士論文作成・完成</p> <p>81~86 X VII. 博士論文予備審査</p> <p>1. 博士論文審査の準備</p> <p>87~88 X VIII. 博士論文審</p> <p>89~90 X IX. 博士論文発表、博士論文完成</p> <p>1. 論文の内容を要点に基づいて発表</p> <p>2. 全過程の自己評価と長期的展望に立った課題の明確化</p>
教科書	関連資料を講義の中で適宜、紹介する。
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。
事前学習・事後学習	研究の完成に向かい、解決すべき課題を事前学習で明確にして授業に臨むこと。
他の授業との関連	専門共通科目及び特論と実践開発看護学特別演習による学修成果を深化・発展させ、看護学特別研究で博士論文を完成させる。
成績評価方法・基準・フィードバック	<p>討論の内容(10%)、研究計画書の作成過程と内容(20%)、研究遂行能力(30%)、博士論文の内容として新規性、独創性、波及効果(40%)を総合して評価する。</p> <p>毎回、授業終了後には疑問を確認し、フィードバックは次回の授業前に行う。</p> <p>研究計画書やデータ解析、論文の作成時、適時コメントを口頭や書類に添付しフィードバックする。</p>
オフィスアワー	適宜、対応する。
備考	博士後期課程における水準を担保した博士論文を作成する。

看護学特別研究(Advanced Research in Nursing)												
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数	150	授業形態	演習	
担当教員	●比江島 欣慎(HIEJIMA Yoshimitsu)											
授業の目的	日々蓄積する保健医療関連データを医療の質の向上、医療安全の担保、患者サービスの改善、効果的な保健活動などに活用することが期待されている。本講義では、科学的学術研究の実施を通して、統計学や疫学、データマネジメント、その基礎となる医療や情報の基礎知識を獲得し、地域や施設内に蓄積された各種データを活用し、現場にエビデンスをもたらす人材の育成を目指す。											
到達目標	①問題を可視化し、解決に必要な学術論文を探し、読み、解決に利用できる。 ②問題解決に必要なデータを準備できる。 ③指導教員の指示に従って、科学研究を適切に計画・実行できる。 ④研究データを適切に管理し、指導教員の指示に従って分析できる。 ⑤分析結果を解釈し、問題解決の検討ができる。 ⑥科学研究の一連の工程をまとめ、適切に公表できる。											
授業の進め方	基本的に学生主体のゼミナール形式で進める。											
	回	内容・教員・形式等										
授業スケジュール	1 2～20 21～45 46～50 51～65 66～73 74～83 84～90	ガイドランス 研究テーマ設定のための論文の抄読・発表 研究目的設定のための論文の抄読・発表 研究計画書の作成 研究データの収集・管理 研究データの分析 分析結果の考察(必要に応じて論文の抄読・発表) 論文の作成、審査会の準備  (授業スケジュールは研究の内容および進捗状況によって適宜変更する)										
教科書	特になし											
参考書・参考資料等	学生と相談の上適宜決めていく。											
事前学習・事後学習	事前学習:学生の興味、テーマに合わせて、進捗状況を見ながら教員の助言を参考におこなう。 事後学習:進捗状況を見ながら教員の助言を参考におこなう。											
他の授業との関連	これまでの講義・演習や量的研究方法論を基盤とする。											
成績評価方法・基準・フィードバック	研究実施や①論文執筆への取り組み(30%)、②博士論文の完成度(70%)を総合的に評価する。 評価内容:科学研究のプロセスを理解できているか(①,②)、学術的価値の大きさ(②)。 フィードバック:評価結果の確認期間を設けて対応する。											
オフィスアワー	授業の前後、および研究室(要事前連絡)にて対応する。											
備考	担当教員は医療に関する資格を保持しないため、研究のテーマおよびフィールドを提供できない旨を理解しておくこと。											

看護学特別研究(Advanced Research in Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	●枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)										
授業の目的	小児看護学領域において、将来教育・研究者として活躍できるように、自らの研究課題の明確化、研究計画書の立案、データ収集及び結果の分析、考察等の過程を通して、自律的に研究実践能力を自ら育成する。実践科学である看護学の体系化に貢献する研究力を涵養し、研究過程を推進しながら、博士論文に関連する副論文を学術雑誌に投稿し、査読を受けて論考する能力を修得し、学術雑誌が求める水準に到達した論文の掲載を達成する。また、研究過程に関する学術セミナーでのプレゼンテーション、討議、研修を通して博士論文完成する。この過程を通して、看護学を体系化するための看護学研究を自律して推進できる能力、看護の質向上に向けての看護実践の改革や看護政策に貢献できる能力を自ら育成する。										
到達目標	①学術的重要性・新規性・独創性を有し、看護実践を進展させる有用性と波及効果が期待できる博士論文を創造する。 ②研究目的が明確で、方法を十分に練った研究を計画する。 ③倫理的配慮は、法令等に従い、所定の手続き・対策を講じる。 ④明確で一貫性がある博士論文を論述する。 ⑤博士論文に関連する副論文を投稿し、学術雑誌が求める水準に到達した論文掲載を達成する。 ⑥博士論文発表会で、発表や質疑応答の回答を適切に述べる。										
授業の進め方	学生が、自らの課題や研究進捗状況をプレゼンテーションし、討論しながら完成度の高い研究計画書の作成から研究の遂行、論文作成ができるように進める。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	I. 研究の構想 1. 修士論文における研究の振り返り、博士論文との関連性 2. 看護現象から研究課題・看護の質向上に向けた研究の構想									
	2～11	II. 研究課題 1. 文献検討・研究課題の明確化 2. 研究課題の概念分析・文献検討									
	12～22	III. 副論文作成 1. 博士論文に関連する副論文の作成 2. 学術雑誌への投稿・審査を受けて論文掲載									
	23～33	IV. 研究計画書作成 1. 研究課題と概念枠組み 2. 研究デザインと方法の検討									
	34～35	V. 第1回学術セミナーでの発表と討議 1. 研究デザインと方法の決定									
	36～38	VI. 研究計画書の自己評価と改善 1. 研究計画書の修正・改善 2. 研究計画書作成過程の自己評価									
	39～40	VII. 研究計画書の審査 1. 研究計画書審査の準備 2. 研究計画書の吟味と洗練									
	41～44	VIII. 倫理審査申請 1. 研究計画書作成後の倫理審査申請の準備									
	45～65	IX. 研究計画書に則り研究の実施									
	66～67	X. 第2回学術セミナーでの発表と討論 1. 看護実践現場等を中心としたデータ収集の進捗状況まとめ 2. データ分析の進捗状況まとめ整理									
	68～70	XI. 学術セミナー後の自己評価 1. 発表に対する評価を受け改善 2. 研究過程自己評価と課題の明確化									
	71～78	XII. 分析結果の論述 1. 目的と分析の妥当性、分析と解釈 2. 分析結果の論述の完成									
	79～82	XIII. 結果と考察と結論 1. 考察と結論の論述の完成 2. 目的、方法、結果の整合性の確認									
	83～84	XIV. 第3回学術セミナーでの発表と討論									

	85～86	1. 博士論文作成・完成 X V. 博士論文予備審査
	87～88	1. 博士論文審査の準備 X VI. 博士論文審査
	89～90	X VII. 博士論文発表、博士論文完成 1. 論文の内容を要点に基づいて発表 2. 全過程の自己評価と長期的展望に立った課題の明確化
教科書	関連資料を講義の中で適宜、紹介する。	
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。	
事前学習・事後学習	研究の完成に向かい、解決すべき課題を事前学習で明確にして授業に臨むこと。	
他の授業との関連	専門共通科目及び特論と実践開発看護学特別演習による学修成果を深化・発展させ、看護学特別研究で博士論文を完成させる。	
成績評価方法・基準・フィードバック	【成績評価方法・基準】討論の内容(10%)、研究計画書の作成過程と内容(20%)、研究遂行能力・状況(30%)、博士論文の新規性、独創性、波及効果 (40%)を総合して評価する。 【フィードバック】授業内で疑問等に応え、フィードバックする。また、提出されたものに対し適時口頭や書面にてフィードバックする。 * 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ、評価を受けられない。	
オフィスアワー	適宜、対応する。	
備考	士後期課程における水準を担保した博士論文を作成する。	

看護学特別研究 (Advanced Research in Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	●植村 裕子 (UEMURA Yuko)										
授業の目的	これまで学修した専門共通科目、専門科目、演習科目の学修成果を統合させ、看護学特別研究では、看護学の発展に貢献する新規性・独創性・波及効果の高い博士論文を完成する。この過程を通して、看護学を体系化するための看護学研究を自律して推進できる能力、看護の質向上に向けての看護実践の変革や看護政策に貢献できる能力を自ら育成する。										
到達目標	①学術的重要性・新規性・独創性を有し、看護実践を進展させる有用性と波及効果が期待できる博士論文を創造する。 ②研究目的が明確で、方法を十分に練った研究を計画する。 ③倫理的配慮は、法令等に従い、所定の手続き・対策を講じる。 ④明確で一貫性がある博士論文を論述する。 ⑤博士論文に関連する副論文を投稿し、学術雑誌が求める水準に到達した論文掲載を達成する。 ⑥博士論文発表会で、発表や質疑応答の回答を適切に述べる。										
授業の進め方	学生は、次頁に示す看護学領域毎の教員研究テーマ一覧を参考に、自分の研究課題に応じた専門的な研究指導が受けられるようにする。また、自ら研究フィールドを開拓し、学生のプレゼンテーションを中心に、教員と討議・検討しながら進める。										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1～2	1. 研究の構想、博士後期課程の研究水準の明示 修士論文における研究の振り返り、博士論文との関連性									
	3～6	2. 研究課題 文献検討・研究課題の明確化、研究課題の概念分析・文献検討									
	7～10	3. 研究計画書作成 研究課題と概念枠組み、研究デザインと方法の検討									
	11～12	4. 第1回学術セミナーでの発表と討議 研究デザインと方法の決定									
	13～16	5. 研究計画書の修正・改善 研究計画書作成過程の自己評価									
	17～18	6. 第2回学術セミナーでの発表と討議 研究過程自己評価と課題の明確化									
	19～22	7. 研究計画書審査 研究計画書審査の準備、研究計画書の吟味と洗練									
	23～24	8. 第3回学術セミナーでの発表と討議 研究過程自己評価と課題の明確化									
	25～28	9. 倫理審査申請書の準備 研究計画書作成後の倫理審査申請の準備									
	29～32	10. 研究計画書に則り研究の実施 データ収集									
	33～36	11. 分析結果の論述 目的と分析の妥当性、分析と解釈、分析結果の論述の完成、副論文の作成									
	37～40	12. 結果と考察と結論 考察と結論の論述の完成、目的・方法・結果の整合性の確認									
	41～43	13. 博士論文作成 博士論文予備審査、審査後の修正									
	44～45	14. 博士論文発表会、博士論文完成 全過程の自己評価と長期的展望に立った課題の明確									
教科書	関連資料を講義の中で適宜、紹介する。										
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。										
事前学習・事後学習	研究の完成に向かい、解決すべき課題を事前学習で明確にして授業に臨む。										
他の授業との関連	専門共通科目及び特論と実践開発看護学特別演習による学修成果を深化・発展させ、看護学特別研究で博士論文を完成させる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	討議の内容(10%)、研究計画書の作成過程と内容(20%)、研究遂行能力(30%)、博士論文の新規性、独創性、波及効果 (40%)を総合して評価する。 毎回演習後にフィードバックを行う。										

	* 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ、評価を受けられない。
オフィスアワー	研究室31(植村) 以下のメールアドレスに要件を書いて事前に予約をとる。 uemura@kagawa-puhs.ac.jp
備考	博士後期課程における水準を担保した博士論文を作成する。

看護学特別研究 (Advanced Research in Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次		学期	通年	単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	岡田 麻里 (OKADA Mari)										
授業の目的	<p>これまで学修した専門共通科目、専門科目、演習科目の学習成果を統合させ、看護特別研究では、専門分野における自らの研究課題を明確に決定し、自らの研究成果によって実践科学である看護学の体系化に貢献する研究力をし、新規且つ独創的な研究計画を立案する。この過程を通して、自律的に完成度の高い研究計画を立案する能力を自ら育成する。そして、研究倫理に沿って研究課程を推進しながら、博士論文に関連する副論文を学術雑誌に投稿し、査読を受けて論考する能力を習得し、学術雑誌が求める水準に到達した論文の掲載を達成する。また、研究課程に関する学術セミナーでのプレゼンテーション、討議、研修をととして博士論文完成に向けて課題を明確にする。この過程を通して、自律した研究者としての研究力、研究成果を論文作成し発表する能力を自ら育成する。</p> <p>最終的に、看護学の発展に貢献する新規性・独創性・波及効果の高い博士論文を完成する。この過程を通して、看護学を体系化するための看護学研究を自律して推進できる能力、看護の質向上に向けての看護実践の変革や看護政策に貢献できる能力を自ら育成する。</p>										
到達目標	<p>①学術的重要性・新規性・独創性を有し、看護実践を進展させる有用性と波及効果が期待できる博士論文を創造する。</p> <p>②研究目的が明確で、方法を十分に練った研究を計画する。</p> <p>③倫理的配慮は、法令に従い、所定の手続き・対策を講じる。</p> <p>④明確で一貫性のある博士論文を論述する。</p> <p>⑤博士論文に関連する副論文を投稿し、学術雑誌が求める水準に到達した論文掲載を達成する。</p> <p>⑥博士論文発表会で、発表や質疑応答の回答を適切に述べる。</p>										
授業の進め方	<p>学生は、次頁に示す看護学領域の教員研究テーマを参考に、自分の研究課題に応じた専門的な研究指導が受けられるようにする。また、自ら研究フィールドを開拓し、学生のプレゼンテーションを中心に教員と討議・検討しながら進める。</p>										
	回	内容・教員・形式等									
授業スケジュール	1	I. 研究の構想、博士後期課程の研究水準の明示 1. 修士論文における研究の振り返り、博士論文との関連性									
	2~11	II. 研究課題 1. 文献検討・研究課題の明確化 2. 研究課題の概念分析・文献検討									
	12~16	III. 研究計画書の作成 1. 研究課題と概念枠組み 2. 研究デザインと方法の検討									
	17~18	IV. 第1回学術セミナーでの発表と計画 1. 研究デザインと方法の決定									
	19~22	V. 研究計画書の自己評価と改善 1. 研究計画書の修正と改善									
	23~35	VI. 研究計画書の完成 1. 研究計画書作成過程の自己評価									
	36~38	VII. 研究計画書審査の準備 1. 研究計画書の審査と準備 2. 研究計画書の吟味と洗練									
	39~40	VIII. 倫理審査申請の準備 1. 研究計画書作成過程の倫理審査申請の準備									
	41~53	IX. 研究計画書の則り研究の実施									
	54~55	X. 第2回学術セミナーでの発表と討議 1. 看護実践現場等を中心としたデータ収集の進捗状況まとめ 2. データ分析の進捗状況まとめ整理									
	56~58	XI. 学術セミナー後の自己評価 1. 発表に対する評価を受け自己評価 2. 研究課程自己評価と課題の明確化 3. 博士論文に関する副論文の作成									
	59~61	XII. 分析結果の論述									
	62~66	XIII. 研究目的と分析結果 1. 目的と分析の妥当性、分析と解釈									

	67～72	XIV. 研究目的と分析結果 1. 分析結果の論述の完成
	73～78	XV. 結果と考察と結論 1. 考察と結論の論述の完成 2. 目的、方法、結果の整合性の確認
	79～80	XVI. 第3回学術セミナーでの発表と討論 1. 博士論文作成・完成
	81～86	XVII. 博士論文予備審査 1. 博士論文審査の準備
	87～88	XVIII. 博士論文著
	89～90	XIX. 博士論文発表、博士論文完成 1. 論文の内容を要点に基づいて発表 2. 全過程の自己評価と長期展望に立った課題の明確化
教科書	関連資料を講義の中で適宜紹介する。	
参考書・参考資料等	適宜紹介する。	
事前学習・事後学習	理論について関心をもち、自己学習して講義に臨む。また、各自の博士論文との関連を意識しながら、プレゼンテーションの準備を行い、ディスカッションを各自の博士論文の発展に活かす。	
他の授業との関連	専門共通科目及び特論と実践開発看護学教育特別演習による学修成果を深化・発展させ、看護学特別研究で博士論文を完成させる。	
成績評価方法・基準・フィードバック	討論の内容(10%)、研究計画書の作成過程と内容(20%)、研究遂行能力(30%)、博士論文の新規性、独創性、波及効果(40%)を総合して評価する。	
オフィスアワー	適宜対応する。	
備考	博士後期課程における水準を担保した博士論文を作成する。	

看護学特別研究(Advanced Research in Nursing)													
必修・選択の区別	必修	学年次		学期		通年		単位数	6.0	時間数	90	授業形態	演習
担当教員	●土岐 弘美(Hiromi Toki)												
授業の目的	<p>これまで学修した専門共通科目、専門科目、演習科目の学修成果を統合させ、看護学特別研究では、専門分野における自らの研究課題を明確に決定し、自らの研究成果によって実践科学である看護学の体系化に貢献する研究力を涵養し、新規かつ独創的な研究計画書を立案する。この過程を通して、自律的に完成度の高い研究計画書を立案する能力を自ら育成する。そして、研究倫理に沿って研究過程を推進しながら、博士論文に関連する副論文を学術雑誌に投稿し、査読を受けて論考する能力を修得し、学術雑誌が求める水準に到達した論文の掲載を達成する。また、研究過程に関する学術セミナーでのプレゼンテーション、討議、研修を通して博士論文完成に向けて課題を明確にする。この過程を通して、自律した研究者としての研究力、研究成果を論文作成し発表する能力を自ら育成する。</p> <p>最終的に、看護学の発展に貢献する新規性・独創性・波及効果の高い博士論文を完成する。この過程を通して、看護学を体系化するための看護学研究を自律して推進できる能力、看護の質向上に向けての看護実践の変革や看護政策に貢献できる能力を自ら育成する。</p>												
到達目標	<p>①学術的重要性・新規性・独創性を有し、看護実践を進展させる有用性と波及効果が期待できる博士論文を創造する。</p> <p>②研究目的が明確で、方法を十分に練った研究を計画する。</p> <p>③倫理的配慮は、法令等に従い、所定の手続き・対策を講じる。</p> <p>④明確で一貫性がある博士論文を論述する。</p> <p>⑤博士論文に関連する副論文を投稿し、学術雑誌が求める水準に到達した論文掲載を達成する。</p> <p>⑥博士論文発表会で、発表や質疑応答の回答を適切に述べる。</p>												
授業の進め方	<p>学生は、自分の研究課題に応じた専門的な研究指導が受けられるようにする。また、自ら研究フィールドを開拓し、学生のプレゼンテーションを中心に、教員と討議・検討しながら進める。</p>												
	回	内容・教員・形式等											
授業スケジュール	1	I. 研究の構想、博士後期課程の研究水準の明示 1. 修士論文における研究の振り返り、博士論文との関連性											
	2~11	II. 研究課題 1. 文献検討・研究課題の明確化 2. 研究課題の概念分析・文献検討											
	12~16	III. 研究計画書作成 1. 研究課題と概念枠組み 2. 研究デザインと方法の検討											
	17~18	IV. 第1回学術セミナーでの発表と討議 1. 研究デザインと方法の決定											
	19~22	V. 研究計画書の自己評価と改善 1. 研究計画書の修正・改善											
	23~35	VI. 研究計画書の完成 1. 研究計画書作成過程の自己評価											
	36~38	VII. 研究計画書審査の準備 1. 研究計画書審査の準備 2. 研究計画書の吟味と洗練											
	39~40	VIII. 倫理審査申請書の準備 1. 研究計画書作成後の倫理審査申請の準備											
	41~53	IX. 研究計画書に則り研究の実施											
	54~55	X. 第2回学術セミナーでの発表と討議 1. 看護実践現場等を中心としたデータ収集の進捗状況まとめ 2. データ分析の進捗状況まとめ整理											
	56~58	XI. 学術セミナー後の自己評価 1. 発表に対する評価を受け改善 2. 研究過程自己評価と課題の明確化 3. 博士論文に関連する副論文の作成											
	59~61	XII. 分析結果の論述											
	62~66	XIII. 研究目的とデータ分析方法 1. 目的と分析の妥当性、分析と解釈											
	67~72	XIV. 研究目的と分析結果 1. 分析結果の論述の完成											

	73～78	X V. 結果と考察と結論 1. 考察と結論の論述の完成 2. 目的、方法、結果の整合性の確認
	79～80	X VI. 第3回学術セミナーでの発表と討論 1. 博士論文作成・完成
	81～86	X VII. 博士論文予備審査 1. 博士論文審査の準備
	87～88	X VIII. 博士論文審
	89～90	X IX. 博士論文発表、博士論文完成 1. 論文の内容を要点に基づいて発表 2. 全過程の自己評価と長期的展望に立った課題の明確化
教科書	関連資料を講義の中で適宜、紹介する。	
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。	
事前学習・事後学習	研究の完成に向かい、解決すべき課題を事前学習で明確にして授業に臨むこと。	
他の授業との関連	専門共通科目及び特論と実践開発看護学特別演習による学修成果を深化・発展させ、看護学特別研究で博士論文を完成させる。	
成績評価方法・基準・フィードバック	討論の内容(10%)、研究計画書の作成過程と内容(20%)、研究遂行能力(30%)、博士論文の新規性、独創性、波及効果 (40%)を総合して評価する。	
オフィスアワー	適宜、対応する。	
備考	博士後期課程における水準を担保した博士論文を作成する。	